

長野県革新懇ニュース

2017 年 1 月号
(発行日 1 月 10 日)
年会費 5000 円 (送料込)
振替 0510-3-15971

211

発行 日本と信州の明日をひらく 県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人：山口光昭 編集長：高村裕
〒380-8790 長野市県町 593 高校教育会館内
TEL：026-234-1231 FAX：026-234-2219 メール：mail@nagano-kakushinkon.com

==== 今号の主な記事 =====

- 1 面 インタビュー
- 2 面 1 面続き、近現代信州の歴史回廊
- 3 面 野党共闘のうねりを地域から
「戦争する国にさせない！」の 1 点で広範な共同
- 4 面 随筆「小林一茶のお正月」堀井正子さん
市川英彦先生のご逝去を悼む
読者のこえ、各地の動き

URL：nagano-kakushinkon.com



左側：奥野衆史さん。
1992 年、東京都生まれ。
現在、信州大学医学部 5 年、
全日本医学生自治会連合中
央執行委員会書記長。
右側：光武鮎さん。
1990 年、神奈川県生まれ。
信州大学医学部卒業、現在、
松本協立病院研修医。

若者の小さな芽

育てる土壌を大切にしたい

おくの しゅうし さん、 みつたけ あゆ さん
奥野 衆史 さん、 光武 鮎 さん

(信州大学医学部学生) (松本協立病院医師)

今回の南スーダンへの

派遣は質的に違う

Q 自衛隊が南スーダンに派遣されましたが、お二人の思いはどうですか？

奥野：やっぱり心配ですし、怖いなという思いです。そもそも日本の国民は自衛隊が戦地へ行くことを求めているとは思えません。むしろ、自然災害とか大きな事故などの際の救援とか救助を期待していると思うし、その点は若い世代も同じだと思います。一方で、若い世代には、どうせ変わらないうちではないか、戦争する国づくりと批判は受けているが、そうはならないでしようという気持ちの人も多いと思います。僕個人としては、いつのまにか空気がつくられ、法律ができて外堀が埋まり、日本のあらゆる活動が戦争に繋がっていくようになることを危惧しています。

光武：今まで 9 条がある中で、武器使用するような場所には日本人を行かせないとしてきたわけだから、今度の派遣はまったく質的に違うし、危険の程度は計り知れないと思います。すごく怖いという気持ちです。しかし、若い人一般は、戦争をリアルにイメージするのがむずかしい

世代だという気持ちもあります。戦争になったら私たちの生活がどう変わるのか、どんなふうに自由や権利が抑圧されるのか想像できないという状況があると思います。

一方で、数十年前から考えれば進歩があるはずで、一人ひとりの人権を大切にしなければという思いや権利意識は確実に育ってきていると思います。だから、その乖離をどうするかということが大切だと思います。

奥野：安保法制の議論の中で、イラクで自衛隊がどんな活動をしたか明るのになったと思います。宿営地に攻撃があり、いつ暴動が起こってもおかしくないという状況で、ものすごい葛藤があったことを強く感じました。南スーダンでは、他の部隊が攻撃されれば駆けつけて武器を使えるし、その結果殺し殺される事態が現実起きるわけですから、イラク以上に大変なストレスになると思います。だから、自衛隊員の命を守る意味でも反対だし、国際平和というなら日本にはもっと他の道があると思っています。

シールズの姿は

衝撃的で新鮮だった

Q シールズを知った時の印象はどうでしたか？

光武：私たちの世代は、自分の考えを言うことがすごく怖い。それは、多様性を認めにくい社会や雰囲気私たちが抑圧された気持ちをつくっているからだと思います。人になんか思われるとか、人からどう評価されとかで私たちは育ってきてしまっている。

受験の点数、態度をみられての内申点などで、人からの評価が絶対と思ってしまう。自分の意見をつくらないようになつてしまっている。だから、シールズの人たちを見て、一つひとつの身近な事例に対して自分の考えたことを蔑ろにしないで自分のなかで育てていく姿は衝撃的でした。それを国会前とか駅前で訴え、それをみんな聞いてくれるんだと気付けたとき、とても新鮮でしたし、かっこいいと感じています。

Q 今の若者についてはどう感じていますか？

奥野：民主主義や人権について若い世代はなかなか実感できず、自分たちの問題として議論することはむずかしい。僕は、大学に入り自治会活動に関わって、アンケート調査などの活動をしてきたが、何故そうした活動が必要かをよく考えました。大学運営の一担い手としての学生を意識しながら自治会活動をするなかで、民主主義に則ったやり方を学んできました。

しかし、ふつうの学生はそういう経験がとても少ないし、僕自身も大学以前は同様でした。小学校から大学まで自分たちで何かを決めるとか、変えていくという経験がない。委員会活動や生徒会活動は授業の一環であり、成績(内申点)を上げる場ではない。主権者、主体者として環境に働きかけていくプロセスを学ぶ場ではなかったと思います。これが若者から民主主義や人権に対する意識が薄れてしまった原因かなと思います。安保法制撤回を求め、友だちと話すことはして

いなかだったんです。国会前に行つて彼らの発言を生で聞いて、僕ら自身が語るということとはこんなにも伝わるのだと素晴らしいことだと気づいて、勇気を貰えた。それから僕は、長野県でも学生や若い人たちがすっかり声を上げてくたへと思いいろんな活動を始めたんですが、それはシールズの声を聞いたのが一つの大きなきっかけでした。

社会への関心の芽を

どう育てるかが大切

この前大学で面白い出来事がありました。昼休みに休憩室で休んでいた時に、ちょうど衆議院の特別委員会がTPPが強行採決されたんです。たまたま僕の所にふらっと歩いてきた同級生と他愛のない話をしていたのですが、ふと彼が「TPP決まったんだって」という話を始めました。「委員会を通ったよ」と答え

僕がやっている活動はクラスの子も知っていてあいつなら喋っても大丈夫、聞いてもいいと思ってくれたのかなと。休憩中にしゃべっても大丈夫という大学の雰囲気だとか、そういうものが自分の周りにもつくつていたらいいなと思っています。学内でも、もともと対話ができるなと思った出来事でした。

光武：小さい関心の芽を育てていかなければと凄く思っています。この前、長野県民医連の 1 年目の職員が集まる新人研修があつて、平和や憲法についての講演があり、その後のグループ討議で「私はこういう話が好きなんだけど余り聞いたことないよね。初めて聞いたことあると思うけどどうだった」と聞いたところ、結構みんな共感して「でもこういうのを話す場所がないよね」という話が出たんです。ね。みんな根は優しく、一人ひとりの命を大切にしたいと思っている人たちなんだけど、それを社会や政治に繋げて考えたり、語る場所が少な

【2 面に続く】

